様式第４号（第３条関係）

論　文　要　旨

氏　　名	野上晋之介

論文の要旨

目的：下顎骨関節突起骨折に対する治療法は外科的治療法と保存的治療法に大別されるが、その選択基準はいまなお議論されるところである。当科では下頸部骨折、基底部骨折に対しては侵襲を伴うが社会復帰が早期に見込める外科的治療法を選択する。一方で、上頸部骨折、頭部骨折に対しては侵襲を伴わないが社会復帰まで時間を要する保存的治療法を選択している。保存的治療の開口訓練時の疼痛を軽減させ治療を円滑に進めるため、近年われわれは顎関節洗浄療法を併用してきた。本研究では、高位の関節突起骨折に対する顎関節洗浄療法の意義を明確にするために、ヒト顎関節滑液中の炎症性サイトカインであるインターロイキン（interleukin=IL）-6(IL-6)の発現と MRI における Joint Effusion との相関関係について検討した。

対象と方法：対象は下顎骨関節突起骨折患者 23 名 25 関節（平均年齢：42.5 歳）とした（高位骨折：16 関節、低位骨折：9 関節)。臨床診断には、臨床所見、断層および単純Ｘ線所見、CT 所見、MRI 所見を用いた。
顎関節滑液採取方法としては希釈法を用いた。パンピングマニピュレーション時に、関節包外への局所麻酔後に、約 2ml の生理食塩水を 22 ゲージの注射針を用いて後外側より上関節腔に穿刺し、10 回パンピングを行った後に滑液を採取し、遠心にて細胞成分を除き、その上清を検体とした。
本研究では 2 種の炎症性サイトカイン（IL-1β・IL-6）の検出を行った。各サイトカインの活性は、Enzyme-linked Immunoabsorbant Assay(ELISA)法により測定した。Assay kit は Quantikine human immunoassay kit(R and D Systems 社、Minneapolis, MN)を用いた。

結果：MRI において 25 関節中 17 関節（68%）に Joint Effusion を認めた。高位の関節突起骨折 16 関節では 15 関節(94%)に Joint Effusion を認めた。Joint Effusion を認めた高位の関節突起骨折 15 関節では 8 関節（53%）に IL-1β が検出され、14 関節（93%）に IL-6 が検出された。その濃度の平均値は IL-1β と比較して IL-6 は有意に高かった。
Joint Effusion を認めた群は認めなかった群と比較して、IL-6 が有意に高率に検出された。また、高位の関節突起骨折は低位の骨折と比較して、IL-6 が有意に高率に検出された。さらに、Joint Effusion の程度と IL-6 の濃度に相関関係が認められた。